

花園育ち11年 私が支える

ラグビー協会理事・谷口真由美さん



花園ラグビー場内の寮で過ごした日々を語る谷口真由美さん(大阪府天王寺区) = 近藤誠撮影

少女時代 スタンド下 家族で生活

ラグビー・ワールドカップ(W杯)日本大会の会場となった大阪府東大阪市の花園ラグビー場で、小学生時代からラグーマンと約11年間暮らした少女がいた。法学者で大阪大非常勤講師の谷口真由美さん(44)。日本ラグビーフットボール協会理事も務め、日本代表の活躍で盛り上がったW杯を通じ、フェアプレー精神などラグビー文化への関心が高まることを期待する。

谷口さんは小学1年だった1981年、奈良市から東大阪市に引っ越した。新居は近鉄が当時所有していた花園ラグビー場の一角にある選手寮。父・龍平さん(72)が近鉄ラグビー部(現・近鉄ライナーズ)のコーチ、母・加代子さん(72)が寮母となり、一家は住み込みで約30人の部員と過ごすことになった。

寮はメインスタンドの下にあり、スタンドの傾斜で居間の天井は斜め。ドアを開けるとロッカールームで、風呂は共用のため、汗を流しに来た選手と鉢合わせ

せしたことも。思春期の谷口さんには「聖地」ではなかった。一方で、選手たちのひたむきな姿勢には尊敬のまなざしを向けていた。選手は近鉄の駅などで勤務した後、夜から約3時間の激しい練習に打ち込む日々。熱を出しても「走ったら治る」とげきが飛び続けた。共同生活はその後の人生に影響を与えた。選手への龍平さんの口癖だった「結果がすべてではない。大事なのはプロセスだ」と言葉は今も鮮明に覚えている。ラグビーに学ぶことも多く、谷口さんは「仲間を信じ、それぞれが役割を担ってトライを目指す。できるだけ簡単には前に進めない。人生そのもの」と奥深さを語る。

しばらく競技とは疎遠になっていったが、W杯の日本開催が決まると、花園ラグビー場に住んだユニークな経験に注目が集まるよう

に。協会から要請があり、今年7月から理事を務めている。W杯の各会場を飛び回って観戦を続けた谷口さんは、「様々な出身地の選手が同じチームの代表ジャージに袖を通し、観客も敵味方なく盛り上がるラグビーの良さが広く認知された」と日本での開催を評価した。

10月上旬には、イラク北部のクルド人自治区を訪れ、持参したラグビーボールを子供たちに手渡した。不規則に転がる楕円球を追う子供たちの姿に、「国境にこだわらないラグビーは平和のスポーツ。クルド人など政治的に困難な状況にあるチームも五輪に出場する日が来てほしい」と願った。

市は、問題発覚後も4人に給与を支払っていたことについて適正な手続きで処



自宅を兼ねていた近鉄ラグビー部の選手寮の前で家族と記念撮影する谷口さん(中央、1984年3月3日撮影) = 谷口さん提供

性教諭1人が、給与の支給を差し止める分限休職処分を不服として、市人事委員 請求は6日付で、男性教諭は「自分が関与した行為について適正な手続きで処 市は、問題発覚後も4人に給与を支払っていたことについて適正な手続きで処 男性教諭側が市人事委に

明るさや 暗 ① 酵素がけ 質を分解 視細胞 明 トランス たんぱ

業員 港 文化に触れる良い機会にな 杯観戦を通じて多くの日本 人が出場国や地域の事情、 ドを合わせた代表だ。「W ンドと英国・北アイルラン ンドのチームは歴史的に争 いの絶えなかったアイルラ 今年7月から理事を務めて いる。W杯の各会場を飛び 回って観戦を続けた谷口さ